

2 アンダルシアの光ーハルチャの詩 Jarchas

Andalucía の Córdoba 市の郊外メディナ・アサーラ (Medina Azahara) 遺跡は 10 世紀 アブデラマン 3 世 (Abderramán III, 929-961) が莫大な富の使い道として王妃アサーラのために作らせた宮殿である。今でもアーモンドの木に囲まれた華麗な建築物の跡がイスラム支配下のアンダルシアの往事の繁栄を偲ばせている。

当時アラビア語を話すイスラム教徒の支配下でもロマンス語¹を維持していたキリスト教徒たちがいた。モサラベ(mozárabe) とよばれるこの人々の言語はカスティールヤ語 (castellano)よりも古い形を残していた。かつてはこの言語の様子を知るための資料は少なく、法令集の中の用語や地名、植物名などに限られていた²。

ところが、最近になって古いアラビア語の文献の中に埋もれていた叙情詩が実は当時の話し言葉のスペイン語で書かれているということが解明された³。それはアラビア語の長詩モアシャッハ (スペイン語moaxaja; アラビア語 مَوْشَحْ muwashshah) の末尾に付されたハルチャ (jarcha; خَرْجَة kharja) とよばれる短詞で、多くは女性の心を歌っている⁴。

ハルチャを含むモアシャハという詩形は、メディナ・アサーラを建造した Abderramán 3 世の時代に、Córdoba 近郊の町 Cabra の詩人 Muqaddam ibn Muafa または Muhammad ibn Hammud が創始したと伝えられる。アンダルシアから発したこの鮮烈な光は文字と言語の高い障壁を築き、その後一千年もの間、闇の彼方で人の接近を拒み続けていた。

¹ 口語ラテン語から派生した各地の言語を「ロマンス語」(romance)という。現在のスペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語などの「ロマンス諸語」(lenguas románicas)のそれぞれの原初の形である。

² Galmés de Fuentes (1983).

³ Watt はハルチャが「大衆的起源のものという性格をもっており、おそらくはアラビア語を理解する聴衆の前で土着の女芸人が唄った歌だったと推測される」と述べている(黒田訳 p.153)。しかし、ハルチャの言語はアラブまたはヘブライ詩人が支配者の立場から再現したモサラベ(被支配者)の言語である、とも考えられる。Gorton (1982)を参照。それならば、jarchaのスペイン語はモサラベの言語そのものではなく、少し距離をおいてその反映である、と見なければならぬだろう。

⁴ 後で見ると、正則アラビア語詩の後に閃光のように輝く恋愛詩が民衆の言葉(ロマンス語)で歌われる、という趣向が生み出す効果のほどは時間と空間を遙かに超えた我々にでも十分に想像できる。cf. P. Dronke (1996), とくに第 3 章。

●ヘブライ文字のハルチャ

ハルチャは当時のアラビア文字またはヘブライ文字で書かれていたためスペイン語話者には文字の理解が困難であった。また、モアシャツハはエジプトなど東方に伝わったものの、アラビア語圏の人々はハルチャの部分のスペイン語がわからず首を傾げていた。このような状況の中で1948年イギリスのヘブライ語学者 Samuel Stern がハルチャを再発見し、その文献学的な解釈に成功したのは画期的な業績であった。次は学界の注目を浴びた Stern の論文にある詩の一編である(11世紀前半 Yosef el escriba の作)。

tnt 'm'ry tnt 'm'ry hbyb tnt 'm'ry
'nfrmyrwn wlyws gyds dwln tnt m'ly

ヘブライ文字で書かれた原文がローマ字に転写されている。たとえば最初の2語 tnt 'm'ry は原文で ת (t), ך (n), ת (t), ם ('), ן (m), ם ('), ך (r), ם (y) が右から連続して תנת םאמארי となっている。このようにヘブライ文字は一般に子音ばかりで書かれるので一見したところスペイン語とは思えない。Stern は母音を補うことによってこれを tanto te amaré という意味に解し、次のような恋の歌を復活させた⁵。母音を補うと次のようになる。

(1)

Yosef el escriba (11世紀前半, Stern 18)
Tan te amaré, tan te amaré, habib, tan te amaré,
Enfermeron welyos gueras (?), ya dolen tan male.

【語句】 **tan** > tanto とても **habib** = amante (アラビア語) 恋人 **enfermeron** > enfermaron 病気にした **welyos** > ojos 目 (Lat. oculus)⁶ **gueras** (?) = cuidados 心配

⁵ ハルチャが当時のスペイン語の口語で書かれていたことは、つとにエジプトの学者イブン・サナ・アル・ムルク (Ibn San al-Mulk) が指摘していたが、これを再発見し文献学的な解釈を決定したのは英国の Samuel M. Stern (1948) であった。これはモサラベの言語(スペイン語)そのものではなくアラビア語話者がスペイン語で表現したものであるかも知れない。いずれにしても当時のスペイン語の様子を知るための貴重な資料になる。

⁶ 現代語の -ll- [ɫ] は Lat. -ll- に由来する。caballus > caballo; scintilla > centella。よって、後に [ɫ] > [x] と発達する Med. -c'l- や -g'l- と区別しなければならない。Rafael Lapeza (1981), p.168-169.

dolen > duelen 痛む **male** > mal ひどく。【現代語訳】 ¡Tanto te amaré, tanto te amaré, amigo, tanto te amaré! Los cuidados han hecho enfermar a mis ojos. ¡Me hacen tanto daño!

【訳】 愛しい人よ、私はあなたをととも愛することでしょう／心の苦しみに (?) この目は病んでしまった、これほど痛いくらいに。

【現代語訳】 ¡Amigo, te amaré tan bien, te amaré tan bien, te amaré tan bien! Los cuidados (?) han hecho enfermar a mis ojos. ¡Me hacen tanto daño!

●アラビア文字のハルチャ

ヘブライ文字のハルチャを解説したSternに続いて 1952 年今度はスペインのアラビア語学者Emilio García Gómezがアラビア文字で書かれたハルチャの詩を解説した⁷。次はその一つである。

(2)

Muhammad ibn Ubada (11 世紀末; Stern 22)

Meu Sidi 'Ibrahim, ya nomne dolje, vent' a mib de nojte.

In (?) non, si non queris, yirey m'a tib. Gar me 'a ob legarte

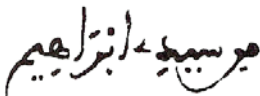
【語句】 **meu** > mi 私の **Sidi** (Ar.アラビア語) = Señor 主人 **ya** (Ar.) = ¡oh! **omne** > hombre 男 **dolje** > dulce 優しい **vent'** > vente 来てください (命令) **a mib** > a mí 私のところへ **nojte** > noche 夜 **In** (Ar.) = Si もし…ならば **non keris** > no quieres あなたが望まないならば **yirey m'** > me iré 私がいきます **a tib** > a ti あなたのところへ **Gar** (Ar.) = Di 言って(命令) **a 'ob** > a donde どこへ **legarte** > llegarte あなたに会うために。

【現代語訳】 Oh, tú, mi dueño Ibrahim, dulce nombre, ven a mi casa por la noche. Si no, si es que tú no quieres, yo me iré a la tuya. Dime dónde te encontraré.

【訳】 ああ、やさしいお名前の私のご主人イブラヒム様、夜に私の家に来てください。もしお望みでないなら、私がいきますから、どこでお会いできるか教えてください。

⁷ E. García Gómez はハルチャがモアシャハに付加されたものではなく、むしろハルチャが先行し、後でモアシャハがハルチャの枠として作詞された、と述べている(1965, p. 29 y sigs.)。この説が正しければ、それはイベリア半島における民衆詩の伝統の存在を裏付けるという文学史上の意味だけでなく、ハルチャの言語が民衆の話すロマンス語の形態により接近することになるので、言語史的にも重要な意味を帯びる。

アラビア文字は不明瞭な部分が多く、上の解釈もこれまでに多くの試みがあったものの一つに過ぎない。たとえば、最初の *Meu Sidi 'Ibrahim* の部分を写本で確かめると次のような手書き文字になっている(【図 1】)。アラビア文字もヘブライ文字と同じように右から左に読む。

【図 1】 

【図 2】 

ハルチャの古文字について詳細な研究をした Alan Jones によれば、【図 1】の最初の 2 文字が続いた部分はアラビア語の $م (m) + و (w) = مو (m-w)$ とも読めるし、 $ف (f) + ن (n) = فن (f-n)$ とも読める。前者の解釈では *mew*、つまりロマンス語の *mio* (>*mi*) 「私の」という意味になるが、後者の解釈では *fen* つまりロマンス語の *ven* 「来て(命令)」という意味になる。

先の *m-w* の解釈にしたがうと所有詞 *meu* は未だ古い形を保っている。これは後に中世スペイン語 *mio* > 現代スペイン語 *mi* となる。次の *ya* はアラビア語の感嘆詞で、12 世紀の『わがシッドの歌』に頻出する。*nomne* や *nojte* は *nominem* > *nomne* > *nombre* と *nocte* > *noite* > *noche* という音声変化の中間段階を示している。

次はこのハルチャ全体の Jones による文字化を簡略に示したものである。

fen (mew) sidi Ibrahim, ya nwamni dalji, fanta mib di nuxti
in nun shi-nun karish, fireme tib, gari mi ub legarti

ここに子音だけでなく母音も付されているのは、アラビア語の原典にある母音符号などを考慮に入れ文献学的な解釈をほどこしたためである。

学者によって解釈の異なるもう一つ別の例を挙げると、最後の句 *legarti* がある(【図 2】)。これを *لفرت* ('-f-r-t) とする説もあるが、Jones は $ف (f)$ の上に付けられる点がスペインなどの西方アラビア語では下に付けるので、これはむしろ *g* を示す $غ$ でなければならぬと主張し、全体を $ل (l) + غ (g) + ر (r) + ت (t) = لغرت (l-g-r-t)$ とした。前者の解釈ではスペイン語の *verte* 「あなたに会う」、後者の解釈では *llegarte* 「あなたの場所に行く」になる。

ハルチャの「発見」以来これまでの半世紀間の諸研究は多くの論争を引き起こし、未だ解釈が決定できないものが多い。スペイン語とアラビア語・ヘブライ語のそれぞれの専門家間の共同研究が待たれている。

●口蓋化と音韻交替

noche や llegar に見られる口蓋化は中世スペイン語の初期に起きた重要な音韻変化である。現代スペイン語で、この口蓋化がある基本語とそれがない教養語が次のように対応している。

	基本語	教養語
ñ : mn	sueño 眠り	insomnio 不眠
ñ : gn	señal 印	signo 印
j : li	concejo 議会	reconciliar 和解させる
ll: l	cabello 髪	capilar 髪の毛

他にも基本語の**-ch-**と教養語の**-ct-**の対応がある。despecho 侮蔑 - despectivo 軽蔑的な; noche 夜- nocturno 夜の; ocho 8 - octavo 8 番目の。

一般に教養語はラテン語形の形を大きく変えていないので他のロマンス諸語やヨーロッパの言語と共通するものが多いが、基本語は固有の音韻変化を辿ってきたのでスペイン語の個性をよく示している。

●音挿入

Lat. nomine > Sp. nombre の過程に見られる-min- > -mn- > -mbr- について考察しよう。はじめに強勢のない語中の -i- が消失し、-mn- となったのであるが、ここから -mbr- に至るには途中で -mr- を想定しなければならない (-mn- > -mr- は異化による)。次に -b- が挿入されるのだが、これは -m- の両唇の閉鎖と鼻腔の開放から直ちに -r- の両唇の開放と鼻腔の閉鎖に移行するときに、途中で次に示すような中間の性質を持つ -b- が挿入されたためである。これを「音挿入」epéntesis という。

	-m-	-b-	-r-
両唇	閉鎖	閉鎖	開放

鼻腔	開放	閉鎖	閉鎖
----	----	----	----

●語根母音変化動詞

スペイン語の音声史の上で重要な変化の一つにラテン語の強勢短母音の二重母音化がある。モサラベが話していたスペイン語にも早くからこの二重母音化があったことが他の資料によって知られているので、先に示したヘブライ文字のハルチャの d-l-n とアラビア文字のハルチャの k-r-s も、それぞれ *dolen*, *queres* ではなく *duelen* と *quieres* のような発音であったと推定される。

さらに興味深いのは先のヘブライ文字のハルチャにある ולייws (*wlyws*) である。これまで学者によって、*welyos*, *oiyos*, *uelios*, *uelyos*, *welyos*, *welyosh*, *olyos* という様々な文字化が提案されているが、これらはすべて現代スペイン語の *ojos* (目[複数]) にあたり、ラテン語に遡れば *oculus* になる。*cul* の部分が口蓋化して [ɔ] [リュ] に変化するが、このような口蓋化された音の前で *o* > *ue* という二重母音なるのはスペイン語音声史ではめずらしくモサラベの特徴とされる。カスティーリャ語では *o* に留まり、最終的に現代スペイン語の *ojo* という形になった。

二重母音化は現代スペイン語の *pensar* (考える), *perder* (失う), *contar* (数える), *mover* (動く) など多くの語根母音変化不規則活用を生んだ。強勢が条件となるので, *pienso*, *piensas*, *piensa*, *piensan* では *e* > *ie* の変化があるが, *pensamos*, *pensáis* では強勢が語尾にあるため二重母音化しない。

語根母音変化といえば, *pedir* (頼む), *medir* (計る) などの *ir* 動詞で, *pido*, *pides*, *pide*, *piden* というように語根母音が *i* という閉母音に変化するものがある。これは、ラテン語の *petio* の *io* という語尾が前にある *e* の母音を変化させて(開口度が狭い母音にして), *petio* > *pido* となったためである。ただし、語尾に(二重母音ではない) *i* がある *pedimos*, *pedís* で *pidimos* のような *i-i* という同じ母音の連続を嫌い, *pedimos* のような *e-i* という形に落ち着いた。*sentir* や *dormir* では二重母音化と閉母音化が同時に起きている⁸。

語根母音変化という現代スペイン語動詞活用の最難関の峠は、ハルチャの詩が歌われていた時代以前に遡るスペイン語の造山活動の結果である。

⁸ 私はスペイン語の動詞活用で一番複雑な語根母音変化動詞の活用を学生に説明するとき、*e>ie*, *o>ue* という変化をする動詞に働く強勢という条件と、*e>i*, *o>u* という変化をする動詞に働く語尾 *i* の条件を示している。後者は複雑なようだが要するに、語尾に(二重母音ではない) *i* があるとき語根母音は *e*, *o* となり、それ以外で語根母音は *i*, *u* になる、という規則にまとめられる。

■テキスト

(3)

Abu Bakr Yahya ibn Baqi (1145; Stern 5)

Vénid la Pasca, ed yo, sin elle!

como ... meu corachón por elle!

【語句】 **Vénid** > viene 来る **la Pasca** > la Pascua 過ぎ越し祭 **ed** > y そして **elle** > él **meu** > mi) 私の **corachón** > corazón 心臓

【現代語訳】 Viene la Pascua y yo sin él. ¡Cómo padece mi corazón por él!

【訳】 過ぎ越し祭がやってくるというのに私の彼はいない。彼のためにこんなに苦しい私の胸。

(4)

Abraham ibn Ezra (1167; Stern 15)

Gar, qué farayu? Cómo vivirayu?

Este al-habib espero. Por el morrayu.

【語句】 **farayu** > haré (私は)...しよう **vivirayu** (Lat. vivere + habeo) > viviré (私は)生きていこう **al-habib** (Ar.) = mi amigo恋人⁹ **morrayu** > moriré (私は)死んでしまうだろう

【現代語訳】 Dime, ¿qué haré? ¿Cómo viviré? Espero a mi amigo; por él moriré.

【訳】 どうしたらよいのか教えておくれ。どう生きていけばよいの？ 恋人を待つ私は、その人のために死んでしまうのでしょうか。

●未来形

この詩には3つの未来形が使われている。ロマンス語ではラテン語の総合形 (forma sintética) を捨てて、不定詞+habeo の変化形という分析形 (forma analítica) を使うようになったが、ハルチャではこの habeo > aio > ayu の古形が残っている。また不定詞の部分も facere > far (farayu) や morire > morr (morrayu) のように短縮されていることにも注意したい。前者は現代語でも haré のように短縮形が用いられているが、後者は

⁹ amigoは「友」ではなく、「恋人」。

moriré のように規則的な変化に戻った。morrayu は mor(i)r の -i- が脱落して -rr- の連続となった点で、現代語の *querré* 「(私は)愛するだろう」と同じである。

(5)

Judá Levi (1170; Stern 2)
Gar si yes devina y debinas bil'haqq
Gar me cand me vernad meu habibi Ishaq.

【語句】 **Gar** (Ar.) = di 言うておくれ **yes** >eres お前は...である **devina** > adivina 予言者 **bil'haqq** (Ar.) = con verdad 確かに **cand** いつ **vernad** > vendrá (彼は)来るだろう **meu** > mi 私の。

【現代語訳】 Dime si eres una adivina que echa la buenaventura según la verdad, dime cuándo vendrá mi amigo Isaac.

【訳】 お前が正しく占いをする占い師なら、どうか私の愛しい人イサクがいつ来るのか教えておくれ。

*ser*の2人称単数は *es* > *yes*のように二重母音化した。現代語の *eres*はラテン語の *esse*の未来形 *eris*に由来する¹⁰。もう1つの動詞 *vernad*は *venire* + *ha* > *venrá* > *verná*の変化を経た未来形である。途中で *-nr-* > *-rn-* の音位転換 (*metátesis*) が起きている¹¹。なお、3人称単数語尾の *-d*はモサラベ語の特徴である。

(6)

同 (Stern 3)
Des can meu Cidello vénid tan bon'l-bixara!
Como rayo de sol exid en Wadi l-Hijara.

【語句】 **Des** > desde以来 **can** > cuandoのとき **meu** > mi 私の **vénid** > viene (彼が)来る **exid** (< Lat. *exre*) = sale 出る。

¹⁰ Menéndez Pidalはこれを「不思議な」変化だと述べている。(...) el castellano tomó extrañamente el futuro *eris eres*. (カスティーリャ語は不思議なことに(ラテン語の)*eris*をとって*eres*とした) *Gram. Hist.*, p.302.

¹¹ 現代語の *vendrá*には *-nr-* > *-ndr-* という音挿入が観察される。これは先に見た、*-mr-* > *-mbr-* と類似する現象である。

【現代語訳】 Desde el momento en que mi Cidiello viene, oh, ¡qué buenas albricias!, sale en Guadalajara como un rayo de sol.

【訳】 私の主人がいらっしやると、—まあ何と嬉しいことでしょう！—グワダラハラの陽光のようなお姿が見られる。

ここでも、*veníd*や*exid*に3人称単数形の語尾-dが確認される。*exid*は古い動詞*exir*の変化形である¹²。一方現代語の*salir*（「飛び跳ねる」）は12, 13世紀に使われるようになった。

(7)

同 (Stern 4)

Garid vos, ay yermanelas, com kontener é meu mali?

Sin el-habib non bibreyo ed volarey demandari?

【語句】 **Garid** (Ar.) = Decid 言っておくれ **yermanelas** > hermanillas 姉妹たち **kontener é** > conteneré (私は)抑えるだろう **meu** > mi **mali** > mal **bibreyo** > viviré (私は)生きるだろう **volarey** > volaré (私は)飛んでいこう **demandari** > preguntar, buscar 聞く, 訊ねる。

【現代語訳】 Decid vosotras, oh hermanillas, ¿cómo refrenaré mi pesar? Sin el amado yo no viviré, y volaré a buscarlo.

【訳】 妹たちよ、この悲しみを抑える方法を教えておくれ、私の愛しい人がいなければ私は生きられない。だから、あの人を探しに飛んで行きましょう。

yermanelas は *yermana* > *hermana*) に縮小辞-*ela* がついたもので、これは Lat. -*illa* に由来する。*kontener* + *é* はいわゆる「分離未来形」というもので、中世スペイン語で頻出する。*bibreyu* には *viv(i)r* > *bibr* の母音脱落 (*síncope*) がある。*demandar*「聞く, 訊ねる」は現代語では *preguntar* に交替した。

¹² Cf. (英語) *exit* 「出口」. Martín Alonso, *Enciclop.* s.v. によれば, *exir* の出現は12-13世紀に限られる。

(8)

同 (Stern 9)

Vay-se meu corachón de mib, ya Rab, si se me tornarád!
Tan mal meu doler li-l-habib Enfermo yed: cuando sanará?

【語句】 **Vay-se** > se va 行ってしまう **corachón** > corazón 心 **de mib** > de mí **ya** (Ar.) (感嘆詞) ああ **Rab** (Ar.) 主, 神 **tornará** > **meu** > mi **li-l-habib** (Ar.) = por el amado 愛しい人のために **yed** > es **sanará** > sanará 癒えるだろう。

【現代語訳】 Mi corazón se va de mí. Oh Dios, ¿acaso se me tornará? ¡Tan fuerte mi dolor por el amado! ¿Enfermo está, cuándo sanará?

【訳】 私の心がいなくなってしまう。ああ、神よ、戻ってくるのかしら？愛しい人のためにこんなに苦しくて、病んでいる。いつ癒えるのかしら？

Vay-seの語順は現代語と異なる。中世では弱勢代名詞は文頭では動詞の後に置かれていた¹³。corachónはラテン語corから派生して増大辞 (aumentativo) -onを伴い現代語corazónに近い形となっている¹⁴。

(9)

Todros Abulafia (1306; Stern 16)
Qué farayo o qué serád de mibe?
Habibi, non te tolgas de mibe!

【語句】 **farayo** > haré (私は) ...するだろう **serád** > será ...だろう **de mibe** > de mí **tolgas** (= quitar) 離す。

【現代語訳】 ¡Amigo, no te apartes de mí! ¿Qué haré, qué será de mí si tú me dejas? (私はどうなるの？愛しい人よ、どうか私を措いていかないで。)

¹³ 中岡 (1993), p.35.

¹⁴ cf. Po. coração, Fr. coer, It. cuore, Rum. inim. スペイン語のこの増大辞はJoan Corominasによれば「勇敢な男性と心優しい女性の偉大なる心」に由来するという。Corominas, Breve Dic. s.v. **corazón**: "Primitivamente sería un aumentativo, que aludía al gran corazón del hombre valiente y de la mujer amante".もちろん言葉の綾である。

farayo, serád の動詞活用形や mib(e) については先に見たので、ここでは tolgas の意味と形態を見よう。Lat. tollere 「取り除く」は現代語では quitar に交替した。語中の -g- は Lat. -ny- と -ly- が -ñ-, -ll- [□] と -ng-, -lg- の揺れ (vacilación) が見られたことが指摘される。

(10)

作者不詳 (?; Stern 33)
Mamma, ayy habibi! sujjamelo aqrella,
el collo albo la boquella hamrella

【語句】 **Mamma** > madre お母さん **ayy** > ay [感嘆詞] ああ **sujjamelo** (Ar.) = chupamieles 蜜を吸う者(あだ名) **aqrella** (Ar.) = rojo 赤い **collo** > cuello 首 **albo** > blanco 白い **boquella** > boquilla (小さな)口 **hambrella** (Ar.) = rojo 赤い。

【現代語訳】 ¡Madre mía, ay qué amigo, Chupamieles roja! Tiene el cuello blanco y la boquita encarnada.

【訳】 お母さん、私の恋人、『赤い蜜吸い』は、白い首筋と紅いの口。

colloは後のスペイン語ではcuelloとなって二重母音化した。Lat. folia > Sp. hoja ([-ly-] > [□] > [-x-]) などの口蓋音の前では二重母音化が起きていないのにLat. -ll- の場合にはそれがあるのは、後者の時期が比較的古かったためであると考えられる。ラテン語形に近いalboはスペイン語ではゲルマン語のblancoに交替した¹⁵。

モサラベの言語的特徴は次のようにまとめられる¹⁶。音韻的特徴としてはラテン語の短母音e, o の二重母音化があり、これは硬口蓋音 (yod) の前でも起きていた (例: foliu > fuel息子; oculu > ualyo目)。また、下降二重母音ai, auの保持、語頭のf- の保持、g (e, i) > y (e, i) の変化 (germana > yermana妹) などがあげられる。文法面では

¹⁵ Martín Alonso, *Enciclopedia*, s.v. albo.: "Ú. desde el s. XIII. En los textos mozárabes y desde el 929 hasta el s. XIII, ALBO se usó como latinismo. No llegó a ser forma vulgar." (13世紀から使われている。モサラベのテキストや929年から13世紀まで、alboはラテン借用語 (latinismo) として使われ、民衆語にはならなかった) ハルチャのモサラベは特に民衆の口語の形態の特徴を示しているので、「民衆語にならなかった」とは断言できないだろう。

¹⁶ Manuel Alvar (1960), pp.3-5.

代名詞mib(i), 動詞3人称単数形の -d, 未来形の -aiの語尾, est > yed接続詞のed (などが重要である。

モサラベは 1086 年のムラービト朝 (almorávides), 1146 年のムワッヒド朝のイスラム教徒たち (almohades) の半島侵入により衰退を免れなかった¹⁷。後に国土回復運動 (Reconquista) によってCórdoba (1236), Valencia (1238), Sevilla (1248) は陥落し, その後彼らの声は消えてしまった。

●アラビア文字

アラビア文字は右から書かれる。そして連続する仕方によって少しずつ形が変わる。

例:

- القاضى al cadí
- القصر alcaçar
- الرّبض ar-rábad
- الزيت azzeit
- حتى hatta

独立形	語頭形	文字名
ا	ا	alif
ب	ب	baa
ت	ت	taa
ث	ث	<u>th</u> aa
ج	ج	jiim
ح	ح	ḥaa
خ	خ	<u>kh</u> aa ¹⁸
د	د	daal

¹⁷ Jaime Vicens Vives (1962). *Aproximación a la Historia de España*. 「1086 年のサグラールハスの合戦, 1102 年のバレンシアの合戦, 1108 年のウクレーズの合戦はすべて侵入者の勝利に終わった。この苛烈な精神的体験は, 彼らを迎え撃ったカスティーリャ人やレオン人の心理に同じ性格の反作用を引き起こした。この時代, すなわち, 十二世紀の初めに国土回復戦争の思想は生まれたのである。」(小林一宏訳『スペイン—歴史的省察』岩波書店, 64 頁.)

¹⁸ 無声軟口蓋摩擦音 [x] cf. Sp. hijo.

ذ	ذ	<u>d</u> haal
ر	ر	raa
ز	ز	zaay
س	س	siin
ش	ش	<u>sh</u> iin
ص	ص	ṣaad
ض	ض	ḍaad
ط	ط	ṭaa
ظ	ظ	ẓaa
ع	ع	'ain
غ	غ	<u>gh</u> ain ¹⁹
ف	ف	faa
ق	ق	qaaf
ك	ك	kaaf
ل	ل	laam
م	م	miim
ن	ن	nuun
ه	ه	haa
و	و	waaw
ي	ي	yaa

次の文字は語尾形と語中形が異なる。

独立形	語尾形	語中形	語頭形	文字名
ع	ع	ع	ع	'ain
غ	غ	غ	غ	<u>gh</u> ain
ك	ك	ك	ك	kaaf
ه	ه	ه	ه	haa

¹⁹ 無声軟口蓋摩擦音 [ɣ] cf. Sp. pago.

●アラビア語起源のスペイン語

現代スペイン語の高頻度語 5000 語の中に次のようなアラビア語起源のものがある。それぞれの世紀は文献に最初に現れた時期を示す²⁰。

- 10 世紀: barrio
- 11 世紀: alcalde, alcazar, aldea
- 12 世紀: arrabal, ronda
- 13 世紀: aceite, achacar, alcoba, alcohol, almacén, alquiler, arroz, asesino, auge, azar, azúcar, garra, hasta, jinete, marfil, rincón, taza
- 14 世紀: alfiler, alforja, andaluz, gabán, guitarra
- 15 世紀: almanaque, azotea, azulejo, cifra, limón, ola, tarea

【課題 2a】 ハルチャの詩に見られる、ラテン語とスペイン語の変化の過程の中間段階を指摘しなさい。

【課題 2b】 アラビア語起源のスペイン語のリストを見て、全体の意味分野の特徴と品詞の分布について気づいたことを述べなさい。

【課題 2c】 アラビア語起源の語を見て気づいたことを述べなさい。アラビア語の定冠詞の部分(a, al)についても注意しなさい²¹。

【参考文献】

Dozy R. W.H. Engelmann. 1869. *Glossaire des mots espagnols et portugais dérivés de l'arabe*. Leiden.

Dronke, Peter. 1996. *The medieval lyric*. 高田康成訳『中世ヨーロッパの歌』水声社、とくに第3章。

Eguilaz y Uanguas, Leopoldo de. 1886. *Glosario eimológico de las palabras españolas de origen oriental*. Granada, Editrial La Libertad.

Galmés de Fuentes, Álvaro. 1983. *Dialectología mozárabe*. Madrid. Gredos.

García Gómez, Emilio. 1965. *Las jarchas romances de la serie árabe en su marco*.

²⁰ 頻度調査はJuilland and Chang-Rodríguez (1952), その分類と分析はPatterson and Urrutibéheity (1975), p.16 による。

²¹ 「太陽文字」と「月文字」の区別に注意。例外は歯茎硬口蓋音のjだが、これは本来gの音で、現代でもエジプトでは「硬いg」[g]が発音される。cf. 池田 (1976), p.6.

- Barcelona. Sex Barral.
- Gorton, Theodore J. 他 1982. 谷口勇訳『アラブとトルバドゥール』芸立出版.
- Heger, Klaus. 1960. *Die Bisher Veröffentlichten Hargas und ihre Deutungen*. Tübingen. Max Niemeyer Verlag.
- 池田修. 1976. 『アラビア語入門』岩波書店
- Jones, Alan. 1988. *Romance kharjas in Andalusian Arabic Muwassah poetry*. London. Ithaca Press.
- Juilland, Alphonse and E. Chang-Rodríguez. 1952. *Frequency dictionary of Spanish words*, The Hague. Mouton.
- Manuel Alvar. 1960. *Textos hispánicos dialectales. Antología histórica, I*. Madrid: Revista de Filología Española.
- 中岡省治. 1993. 『中世スペイン語入門』大学書林.
- Patterson, William and Hector Urrutibéheity. 1975. *The lexical structure of Spanish*, The Hague. Mouton.
- Rafael Lapeza. 1980. *Historia de la lengua española*⁹, p.168-169
- Solá-Solé, Josep M. 1990. *Las jarchas romances y sus moaxajas*. Madrid. Taurus.
- Stern, Samuel. 1948. "Les vers finaux en espagnol dans les muwassahs hispano-hébraïques" *Al-Andaluz*, 13, pp.299-346
- _____. 1953. *Les chansons mozarabes*, Palermo.
- _____. 1974. *Hispanic-Arabic strophic poetry*. Oxford. Clarendon Press.
- Vicens Vives, Jaime. 1962. *Aproximación a la historia de España*. 小林一宏訳『スペイン—歴史的省察』岩波書店, 1975.
- Watt, W. Montgomery, *A history of Islamic Spain*, Edinburgh, 1965. 黒田壽郎訳『イスラーム・スペイン史』岩波書店, 1976. とくに第9章.
- Wilson Edward M. 1977. *Entre las jarchas y Cernuda. Constantes y variables en la poesía española*. Barcelona. Ariel.